

1:1-2	3:1-2
<p>1 アミタイの子ヨナに、次のような主のことばがあった。</p> <p>2 「立ってあの大きな都ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」</p>	<p>1 再びヨナに次のような主のことばがあった。</p> <p>2 「立ってあの大きな都ニネベに行き、わたしがあなたに伝える宣言をせよ。」</p>

・ヨナ書の冒頭の言葉と重なる。

3 「ヨナは、主のことばのとおり、立ってニネベに行った」

・「主の御顔を避けてタルシシュへ逃れようとした」（1:3）と対照的。

3 「非常に大きな都」

・「非常に」と訳されたヘブル語は“^{エロヒーム}אלהים”（神）。

→直訳「神にとって大きな（重要な）町」

・多くの翻訳は“^{エロヒーム}אלהים”を最上級を意味する慣用的な表現と理解して「非常に」と訳す。事実、他の箇所でこのような用法が見られる。

創世記 30:8 そこでラケルは、「私は姉と死に物狂いの争いをして（直訳「神の争いをして」）、ついに勝った」と言って、その子をナフタリと名づけた。

1サムエル 14:15 そして陣営にも野にも、すべての兵のうちに恐れが起こった。先陣の者、略奪隊さえ恐れおののいた。地は震え、非常な恐れ（直訳「神の恐れ」）となった。

↓

では、どちらの理解をとるのがよいのか？

↓

・ニネベとその人々が神にとって重要であることはヨナ書全体を通して知られる。その神のみ思いを預言者ヨナが知ることが、ヨナ書の中心的なテーマである。したがって、直訳「神にとって重要な町」はヨナ書全体の文脈にかなっている。

・他方、「行き巡るのに三日かかるほど」という言葉と共に使われているので、慣用的な表現と理解して「非常に大きな都」と翻訳することも、前後の文脈にかなっていると言える。

↓

・以上より、“^{エロヒーム}אלהים”は「非常に」と「神」の二重の意味で使われていると考えられる。一つの言葉に複数の意味をもたせることは、聖書の中によく見られる。

3 「行き巡るのに三日かかるほど」

・当時の資料と近代の考古学的な調査からから、前7世紀初めにアッシリヤの王セナケリブが、ニネベの町の周囲を4.65kmから10.9kmに拡張したということが分かっている。このことからすると、町を歩き巡るのに3日は要しないことになる。

・創世記10:11-12から、ニネベはニムロデが建てた町の一つで、彼が建てた4つの町を「大きな町」として見なすことができるかもしれない。

創世記 10:11 その地から彼はアッシュルに進出し、ニネベ、レホボテ・イル、カルフ、

創世記 10:12 およびニネベとカルフの間のレセンを建てた。それは大きな町であった。

・この解釈が正しいとすれば、「大きな都ニネベ」は城壁に囲まれたニネベの町だけでなく、その周辺の地域をも指すものと考えられる。「牟礼」という地名も「牟礼町」を指す場合（広い地域）もあれば、「牟礼町牟礼」（限定された地域）を指す場合があるのと似ている。
→ヨナは「ニネベ」だけではなく、「大ニネベ」に遣わされたと考えられる。

4「ヨナはその都に入って」

・ヨナの出発（3節）とニネベへの到着（4節）の間は省略されている。ニネベはイスラエルから約800kmで、一ヶ月の道のり。

4「あと四十日すると、ニネベは滅びる」

・ヘブル語では5つの語。ヨナの使信の要約であろう。これだけを語ったわけではないだろう。ヨナの使信が凝縮されている。

4「滅びる」

・元々の意味は「ひっくり返す」。
・ソドムとゴモラを「滅ぼす」（創世記19:25、哀歌4:6、アモス4:11）、「手綱を返す」（1列王記22:34）、「クシュ人がその皮膚を、豹がその斑点を、変えることができるだろうか。」（エレミヤ13:23）などと使われる。つまり、この言葉は、「滅ぼす」とも「人の心の向きを変える」とも、どちらの意味にも使うことができる言葉である。ヨナはここで前者の意味で用いている。ニネベは滅ぼされず、方向転換をした。

5「断食を呼びかけ、身分の高い者から低い者まで粗布をまとった」

・古代世界における悲しみ、へりくだり、悔いを表すための一般的な方法で、まことの悔い改めのしるしであった。

・ヨナと同時代の預言者ヨエルも悔い改めのしるしとして断食と粗布をまとうことを呼びかけた。

ヨエル 1:13 粗布をまとって悼み悲しめ、祭司たちよ。

泣き叫べ、祭壇に仕える者たちよ。

私の神に仕える者たちよ、行って

粗布をまとって夜を過ごせ。

穀物と注ぎのささげ物が

あなたがたの神の宮から退けられたからだ。

ヨエル 1:14 断食を布告し、きよめの集会を召集せよ。

長老たちとこの国に住むすべての者を、

あなたがたの神、主の宮に集め、

主に向かって叫び求めよ。

・粗布は厚手の粗い布で、通常、山羊の毛で作られていた。それをまとうことは、地上的な慰めや快樂を拒むことを象徴的に示した。

6「このことがニネベの王の耳に入ると」

・5節の内容というよりも、ヨナの語ったメッセージのことだろう。5節と6節を時間的に連続していると見なす必要はなく、5節で全体的な視点で語ったことから、6節では王の視点に切り替わったと見なすことができる。

7「人も家畜も、牛も羊もみな、何も味わってはならない」

・人間だけでなく、家畜にも断食が命じられた。

→それほどまでに緊急で切迫した事態だと受けとめたのだろう。

8「ひたすら神に願い」

・直訳「力をもって神に願い」

9「もしかすると、神が思い直してあわれみ」

・同時代の預言者ヨエルもイスラエルに対して同じことを語った。

ヨエル 2:13 衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け。

あなたがたの神、主に立ち返れ。

主は情け深く、あわれみ深い。

怒るのに遅く、恵み豊かで、

わざわいを思い直してくださる。

ヨエル 2:14 もしかすると、主が思い直してあわれみ、

祝福を後に残しておいてくださるかもしれない。

あなたがたの神、主への

穀物と注ぎのささげ物を。

・赦しは神の主権に属すことであり、神に赦さなければならない義務はない。しかし、神があわれみをもって思い直してくださるかもしれないと期待した。

9「私たちは滅びないですむかもしれない」

・ヨナ書の異邦人の祈り

1:6 すると船長が近づいて来て、彼に言った。「いったいどうしたのか。眠りこけているとは。起きて、あなたの神に願いなさい。もしかすると、その神が私たちに心を留め、私たちは滅びないですむかもしれない。」

1:14 そこで彼らは主に向かって叫んだ。「ああ、主よ。どうか、この男のいのちのことで、私たちが滅びることのないようにしてください。咎なき者の血の報いを、私たちの上に下さないでください。主よ。あなたは、望まれたとおりになさったのですから。」

・船長、水夫も神が自分たちを滅ぼさないことを願っている。ヨナ書に登場する異邦人の祈りは、みな主が自分たちを滅ぼさないことを願い求めている。

10「神は彼らに下すと言ったわざわいを思い直し」

・9節の「思い直し」を受けている。神はわざわいを思い直されるお方。神がみこころを変えられることは、神の失敗を示すものではない。むしろ、ご自身の変わることはない性質（あわれみぶかさ）に対して真実であろうとする強い願いを示している。